

デジタルとアナログ②

錦織監督

映画の現場から



●〇・4

フィルムはアナログだからデジタル画像より劣っている、と思われがちだが、実はそのクオリティーにおいて、デジタル画像はいまだフィルムの足元にも及んでいないということを前回書いた。

テレビがデジタル化され、双方向に情報を交わすことが可能になり、デジタルカメラで撮った写真は格安にプリントアウトできるようになった。生活に大きく貢献しているデジタル技術だが、映画のアーカイブスや映像の記録や保存となると話は違ってくる。

100年先にも見られる可能性が高いフィルムと違って、USBやSDカ

高品質の映像を未来へ

ード、パソコンなどに保存されたデジタル画像の将来的保証はない。しかもこの先さらなるデジタル技術の発達によってクオリティーが高くなったときに、現在のデジタル映像では対応できなくなる可能性がある。

私はデジタルとアナログの違いをよく、西陣織で織られた着物とポリエステルなどの化学繊維で仕立てられた着物に例えることがある。かたや高価で保存も大変、かたや扱いやすく安価である。明らかに「モノ」が違う。好みと違ってしまえばそれまでだが、着る場所や目的によって役割や価値が違う。デジタルカメラで撮られた写真は随分ときれいになりアルバムに貼るには申し分ないし安価。かたやクオリティーは高いがフィルムカメラでの撮影は高コストで蓄積された技術経験が必要。

映画「ミラクルバナナ」の取材の際、和紙職人さんになぜ高価な和紙が今でも残っていると思うか?と問われた。墨で和紙に書かれた文字が古事記や日本書紀の時代から残っているのに対し、洋紙の便せんに書いた文字は近い将来消えるだろう、という答えだった。「必要だからあるんだよ」という和紙職人の言葉にローテクだと思ひ込んでいた伝統技術が違って見えた。

デジタル技術が生活を豊かにしてくれたことに異論はないが、先進技術は必ずしも人間の発展につながっているわけではないという気がしてきた。

(錦織良成・映画監督)

— 第2、4金曜掲載 —



映画「RAILWAYS」49歳で電車の運転士になった男の物語」の撮影風景